

『続古事談』写本（フエリス女学院大学附属図書館蔵）の 翻刻と国語学的私注〈5〉

勝 田 耕 起

【翻刻】

(16) 一条院御時、臺盤所^(だいばんじよ)にて地火炉^(ぢくわ)ついて*と云事ありけり。

左大臣、傳大納言^(ふのだいなん)なんとつかうまつられ*けり。大納言は銀にて土銅^(つちなべ)を作りて、杓^(しやく)をたて*、芋粥^(いもがゆ)を入れたりけり。

中の渡殿に上達部^(じやうたつぶ)候^(まう)て、後涼殿^(ごりやうでん)の広庇^(ひろひ)に、包丁^(つづ)*

の人々、高雅、明原^(あきもと)など候けり。供御まいらせ、人々の衝^(つ)重^(おも)すへて、御酒^(みさけ)しきりにまいらす。管絃^(くわんげん)を奏す。酔^(よひ)て

そみて*傳大納言たちて舞ほとに、冠^(かむり)*落ちにけり。人々咲^(わらひ)*あへるに、広幡^(ひろはた)のおと、*嘲ち^(あざわらひ)*られるをき、て、こ

の大納言「何事いふぞ、妻をは婚か*れて」と言はれたりける*、聞人「恥^(はぢ)をしらす*、うたてき事也」とそ言ひあひける。

さて中宮の御方にわたり給て、御遊^(みまはし)*ありけり。上*、御笛^(みふエ)ふき給けり。道総^(みちのぶ)*卿、なてしこ折^(お)りて御かさしにたてまつ

る。其後、宮より御おくり物、人々の禄なと有けり。

【注釈】

●臺盤所 「台所」のもの。源氏物語「女御の御方の大はむ所に寄りて」(常夏)。「台所」は中世以降の語

で、日国「語誌」や『講座日本語の語彙⑩

語誌2』遠藤好英「台所 台盤所 厨

勝手 御台所 尼御台」がある。「台盤」は

食器類を載せる脚付きの台のこと(下図…

年中行事絵巻・巻六「臨時客」の場面。日

国の図を転載)で、内裏式(八三三年)に

「立臺盤、置銀筋匙」(八日賜女王祿

式)とあるが、中国語例は『円悟仏果禅师語録』「神前酒臺盤」(卷



第十一、一一三三序」といった例のように日本の例より古いものは未見で、影響関係はよくわからない。

一方「大盤」という漢語もあり、**色**「大槃タイハン 臺盤同」(タ雑物、黒川本・二巻本)、「大盤タイハン」(タ雑物、十巻本)という例からは「台盤」と「大盤」とは通用したようにも思えるが、延喜式(九二七)二四・主計「播磨国(略)調(略)大盤七十五合(略)小盤有蓋八十合」、和名抄「盤(佐良)器名也」(器皿部瓦器類)、**色**「盤 サラ」(サ雑物)とあるように「盤」は「皿」のことで、大盤は大皿(食事用の大きな器)を指すだろうから、内裏式の「臺盤」とは異なると考えられる。ちなみに漢字音は「大」は呉音タイ、漢音タイ、「臺」も呉音タイ、漢音タイ(「盤」と「盤」はタイの意味で通用し、呉音ハン、漢音ハン)である。区別があった「臺盤」と「大盤」とは同音の飲食調度語彙ということと色葉字類抄の頃まで混同し、以後、「臺(盤)所」に一本化したということであろうか。枳園本節用集「臺盤所タイハントコロ」「臺処ダイトコロ」(タ天地)、「Daibandoro」(日本)。

●地火炉ついて いろいろ(泥をぬり固めて作った炉)で物を焼く饗応。「ついで」については13話注釈参照。「地火炉ついで」がどのように行われたかについては、今野鈴代『源氏物語』表現の基層』(笠間書院、二〇一一)に「第三章 六条院の筍料理―地火炉

次のこと」がある(初出『ぐんしよ』六四号、二〇〇四)。漢訳仏典と漢籍の例は次のようなものがある。

① 於此像前、作四方壇。(中略)又於壇前、作地火炉。中安^{おひ}炭火。以^{おひ}蘇摩芥子、燒^{やひ}於爐中。(金光明最勝王經(義淨837.73) 卷第八・僧慎尔耶葉叉大将品第十九)※『国宝西大寺本金光明最勝王經・天平宝字六年百濟豊虫願經』(勉誠社二〇一三)によれば「地」字に白点が見え、春日政治『西大寺本金光明最勝王經古点の国語学的研究』釈文は「地の火炉作レ」としている。

② 壇西南角安地火炉。中央高四面下。(阿吒薄俱元帥大將上仏陀羅尼經修行儀軌・上卷(善無畏837.73) 訳)

③ 復此紅火炉、雪中相暖熱(白居易(772.846) 別氈帳火炉詩) 国内用例としては漢詩文の「火炉」が古い。次の例を岩波旧大系は暖炉と訳している。

④ 白茅^{ちかやの}簷^の下 火炉前 侍^{ちかやの}坐兒童 倚^{ちかやの}壁眠 (管家文章「九〇〇頃」四・冬夜閑思)

⑤ 有申文、余着座、進火炉之後、良久不申文、文刺忽無也

⑥ 「御前の火炉に火をおく時は、火箸してはさむ事なし」(権記・長保三年(一〇〇一) 二月二六日) (徒然草・二二三)

「火炉」は火を入れて暖をとるもので、ポータブルな火鉢（火桶・炭櫃）との区別で、「地火炉」はいろりのことを言うようになった。次のように香炉のことも「火炉」といったから、囲炉裏の方を「地火炉」と言ったか。

⑦ 正月最勝王経齋会堂装束（略）白銅火炉三口。一口仏前料。

二口行香料（延喜式・一三・凶書寮）

⑧ 凶書官人持火炉（延喜式）従之、行香畢

（江家次第（一一一頃）五・円宗寺最勝会）

⑨ 色「火炉 ヒタキ」（七雑物）、名義抄も同じ。

⑩ 楊氏漢語抄云火爐比多歧（和名抄・燈火部燈火器）

一〇世紀末以降、公家日記にも和文にも「地火炉」が多く現れ、「地火炉次」も見える。同じ行事を「羹次」と記録したのもある（権記）。⑪⑫⑬は『小右記』寛和元年（九八五）の例。

⑪ 早朝従内退出、渡殿地火炉始塗、聊儲小食（正月一九日）

⑫ 遠資朝臣来、聊有如地火炉次之事、外記政始、廿二日（中略）

⑬ 遠業朝臣地火炉次如昨、参内、候宿、今日始薬所、（正月二二

日〜二二日）

⑭ 今日有御蹴鞠之事、候宿、勘解由判官明尹地火炉次（次）（中略）是光 地火炉次（二二日）

⑮ 昼ほゆる犬（中略）火おこさぬ炭櫃、地火ろ。

（枕草子・二二・すさまじきもの）

⑮ 御厨子所の方を見れば、さるべき下臈男どもや（中略）袂あ
げたる下法師ばらのつきづきしき五六人、地火炉のもとに居
並みて、御饌（おもの）どもを急ぐめり（采花物語・玉のうてな）

⑯ 長地火炉二俎（まないた）共七八ツ立テテ万ノ食物置テ散シテ男共有リ

（今昔物語集・一六・二〇） ※長い囲炉裏。泥をぬり固めて
つくった長い炉。（日国）

⑰ 敷^二高麗端（たて）畳三枚、為^二御座^一。其前有^二地火炉^一。御座後、立^二

唐紙屏風二帖^一。炉東立^レ棚、居^二菓子^一。其傍置^二御硯（ついで）管^一。其

東立^二三間廊^一、為^二北面^一。切^二長地火炉^一、其左右敷^二紫端

畳^一。（高野御幸記・天治元年（一一二四）十月二十六日）

⑱ 「新しき嫁を饗せんとて、当国隣国のそこばくの郎等ども日ごと
に事をせさす。陸奥のならひ、地火炉ついでとなんいふな
り。もろもろの食ひ物をあつむるのみにあらず、金銀、絹布、

馬鞍をもちほこぶ」（奥州後三年記（一三四七）上、※群書

類従による）

枕草子の例のようにスピツとチカロとは区別されていたが、すこ
し時代が下ると、次の例のように言い換え可能だという内省その
ものを記す用例も見えてくる。

⑲ スピツヲチロトナツク、如何。地爐也。地火爐トイヘルモ同じ。

(名語記・三卷の三二ウ)※日国「じかろ」の項はこの例を「地
下・**下・**」と表示するが、根拠は不明。勉誠社(一九八三)活字
本では「地火爐」。

⑳ 思はむ子を法師になさむこそいと心苦しけれ。(中略)或は、
ことは・文字づかひなどこそ、げに俗にはたがひたれ。かゆ
をば「のむ」といひ、火ろをば「ちろ」といひ、湯浴むるを
ば「あかすりせむ」といふに、かかる事ども、いと多かるべし。
されど、それらもとよりあてなる人は、いとさしもなくや
あらむ。(前田家本枕草子(鎌倉中期書写)・二六八・おもは
む子を。三卷本・能因本には無い部分)※堺本は「きぬをば
『つくらん』といひ、こめろをば『かみ』といひ」(二四三段。
「地炉」には「多くないが」漢文の例がある。つまり8世紀には「地
炉」「火炉」「地火炉」とも漢籍仏典の例があり、日本語彙に入っ
てきたと考えてよいであろう。

㉑ 黄沙万里百草枯(中略)軍中無事但欲娛 暖屋繡簾紅地爐(岑
参(715-770)「玉門関蓋將軍歌」)※訳…玉門関の城は砂漠の
真ん中で草木も無い。仕事がなければ楽しみばかり。暖かい
兵営には刺繍のカーテンをかけ、ストーブをおこし…(田中
克己「岑参二題」『成城文藝』一八)。「漢語大詞典」には「就
地挖砌的火炉」とあり、この例を挙げる。

古本系の陽明本ほか宇治拾遺物語写本に「ちくわら(ろ)に火お
こしして」(二三、用経荒卷事)と仮名書きの例があり、語形は音
よみの「ちくわろ」であると考えられる(日国補注に「地火炉」
のよみは「じひろ」「じほろ」「ちひろ」「ちかろ」などとする説も
あるが、明証を得ない。)とあるが、「火」を訓読みする「説」の
出どころは未確認。旧大系「宇治拾遺」注に「ちほろ」という訓
があるという記述がある)。語頭の清濁については確証がない
(「地」は吳音子、漢音子)。合拗音クワは近世まで残存したと言わ
れる(沖森卓也『日本語全史』一九四頁)。

ちろ(地炉)は右の『名語記』以前には『宇津保』の例が指摘
されているが、現代の校訂本文ではあまり採用されていない。「火
炉」が延喜式や和名抄に見えるのに対し、「地炉」は総じて古典籍
の用例が少なく、一方で全国の現代方言に残っていることから、
文章語⇨火炉・地火炉、民衆の口語⇨ちろ、というような関係だっ
たとも考えられる。

㉒ ここは三条の西の方。民部卿、中納言もの参る。御前に千ろ
して、さかり(鉢?)などして物調ず。破子、する物(すみ物?)
陶物?)あり。

㉓ 殿中東南の隅を隔て地炉有り。冬の初より火を熾し、夏の初

に至りて蓋を覆ふ。(年中行事秘抄・鎌倉初期)

宇津保は同じ前田本底本でも、野口元大校注(明治書院、一九九九)では「地炉」とするが、中野幸一校注(小学館新編全集、一九九九)や室城秀之校注(一九九五初版、二〇〇一改訂版)では「火炉」を採る(校異として「地炉」を記す)。浜田本、桂宮本も「ちろ」だが、浜田本底本の原田芳起校注本(角川文庫、一九七〇)は「火炉」とする。十世紀における「火炉」の根拠は右に示したようにいくらかもあるが、「地炉」として八世紀の中国漢詩例と鎌倉時代の名語記の例などからすれば、表に現れにくい俗語として中古から存在したということは考えられるのではないだろうか。

前田本「ちろ」の「本」という傍記は「国護下」巻に9か所あり、おそらく「本ノママ」(同巻に1例)と同じ意味で「不審な箇所だが親本に従ってそのまま写した」という注記だろう。だから古典文庫本(や同一校者による笠間書房索引)でも変体仮名「千」のまま翻刻されている。「地炉」という語が存在したことは確かだが、古典籍の書写者にとっては「地火炉／火炉」などと比べて身近でなかった、という位相の問題により伝本に書き入れがなされ、それを重く見た現代の研究者も中古和文に用例の無い「地炉」は採用しにくかった、というのがこれまでの「ちろ」に関する認識なのだろう。

念のため仮名の形について検討しておく、一文字の「ち(炬)」と、「くわ(炬)」という二文字連綿との間で相互に写し間違いが起る可能性は、無くはないと思う(図1、図2参照。字母「知」と「久和」、字母「遅」と「久王」)。が、前田本に関しては「ち」は「千」の字母でかつ「本(ノママ)」という存疑マークを付しているの、これは「ち」と読めるが「ちろ」が何だか分からないということであり、この種の写し間違い(「くわろ」と書いてあるのを「ちろ」と解読した)ではない。

【図1】ち(知)



【図2】ち(遅)



ところで、イロリというのは中世以降の単語で、「囲炉裏」「居炉裏」という用字もあて字と言われている。ユルリ↓イルリ↓イロリと変化したか。

②4 畳のへりふむべからず。さえの上^レに立たず。ゆるり^レのふちこゆべからず。(極楽寺殿御消息(平重時家訓)(13C中、尊経

閣文庫蔵、北条重時[1198-1261] 第九条。『中世武家家訓の研

究』資料編八〇頁)

㊤ 「囲炉裡イロリ」(イ財宝)、「火爐ユルリ或作地炉」(ユ天地)

(明応五年本節用集(二四九六))

日国語誌(一) 中世からイロリ・イルリ・ユルリの形で文献に現われる。(中略) 写本と版本との間で新語形(口語)と伝統形(文語)の対立が認められる傾向があるという「甲陽軍鑑」において、写本・版本の両方にイロリ・イルリが共に見られることから、口語・文語とも語形にゆれを生じていたことがうかがわれる。

(2) 近世以降「囲炉裏」の漢字表記が一般化するにつれ、イロリが標準語形としての位置を獲得したものと思われる。

【参考】「木綿以前の事(囲炉俚談・初出「文学」一九三五年三月)」

(柳田国男)「有名な『後三年絵詞』の「地火炉ついで」の話などもあって、「地炉」に近い語は早くから知られているが、右の全国的なるジロをもって、軽率に地面にしつらえた炉のことと、解してしまふことは事実の無視になる。現在各地のジロはおおむね「すのこ」の上に切つてあるのが一つの理由である。第二には以前は床を張らぬ小民の家が多く、そこでは炉はことごとく地上のものであった。特に庭籠にわかごのみに限つて、この名を附与する必要はなかったのである。(三) 地火炉という名は現実にはまだ耳にしたことがない。是も漢字の組合せが無理だから、事によると中古の宛て字

かも知れない。ジロは少なくとも炉が漢語から、成り立つたものとは言い切れぬのである。」

●つかうまつら(れ) 中古に用いられた謙讓語。お仕え申し上げる意で、「つかへまつる(仕奉)」の変化したもの。「れ(る)」は尊敬。古語大辞典「つかうまつる」「つかまつる」に語誌(杉崎一雄執筆)あり。「つかまつる」が多用されるのは中世からだが、それは「行ふ」などの謙讓・丁寧用法が主で、もとの(「仕える」)謙讓用法は「つかうまつる」の形で徒然草などでも用いられているとする。続古事談では「笙ヲソツカマツル」(42話)、「モトノゴトクツカマツルベシ」(64話)、「和琴ツカマツルモノスクナシ」(151話)といった例があつて「行う」の謙讓とみてよさそうだが、

「今日琵琶ツカウマツルマジキ日也」(149話)などの例をどう考えるか。(つかうまつる12例)。穂田定樹「致す」「仕る」の交渉(『国語国文』二九の四、一九六〇)は「修行(を)ツカマツル/イタス」のような用法における両者の差異について、今昔物語集以降の分析をしたもの。続古事談は考察対象になっていないが、「朗詠イタス」(22話)があるので穂田の論を参考にすることができる。

用例を古い順に並べると次のようになる。

(ア) 其しが尽くるまでに大君に堅く都柯陪麻都羅むと

(日本書紀・雄略二二年一〇月・歌謠)

(イ) 降る雪の白髪までに大君に都可倍麻都礼ば貴くもあるか〔橋諸兄〕(万葉集・一七・三九二)

(ウ) 恒に親り十方の仏に承〔ツカマツル〕こと得しめむ

(西大寺本金光明最勝王經平安初期点(八三〇頃)二)

(エ) 一は自身を施し奉り、僕(わらわ)と為り、使〔ツカムマツル〕所なり

(石山寺本蘇悉地羯羅經略疏寛平八年点(八九六)七)

(オ) 二条の后につかうまつる男ありけり。(伊勢物語・九五)

(カ) そのわたりの下衆などの、僧都につかまつりける

(源氏物語・手習)

(キ) 燕丹秦皇に事〔ツカムマツ〕りて、遙かに久年を経たり

(将門記承徳三年点(二〇九九))

(ク) 外道万余人。並に多く大自在天をたふとひ事〔ツカウマツル〕

(大唐西域記長寛元年点(一一六三)七)

(ケ) 「ミナコレヲキヨヨウ〔ucamatqura〕ツカマツラ〕ナンド」

(天草ヘイケ・三・五)

語形はツカヘマツル↓ツカムマツル↓ツカウマツル↓ツカマツルと変化したと考えられるが、(ウ)のように「ツカマツル」の出現が早い。これについては日国「つかまつる」の補注に「平安初期の訓点資料にみられる「つかまつる」は、あるいは「つかむまつる」「む」は撥音mか)の撥音無表記とも考えられるとする説がある。

平安初期から中期にかけてのころの他の資料の用例にも、ほぼ同様の事情があったかもしれないが、当時、確実にこの語形の存在を主張することはむずかしい。」とある。

●土鍋 「埵ツチナベ」〔図書寮本名義抄〕

●ひさこ 〔色〕「杓ヒサコ 斟水器也」(ヒ雑物)。瓢箪やそれで

作った食器。粥を掬うためのおたまのようなものか。古語大辞典・

語誌「類聚名義抄には第三音節に単点があるから、古くはヒサコ

であった」(山口佳紀)

●たてて 今昔「大キナル銀ノ提(ひさこ)」(の水飯) 二大キナル銀ノ匙(ひさこ)ラ

立テ、重氣二持テ前二居タリ」(二八の二三、宇治拾遺九四も同話

「銀の提に銀の匙を立てて」) は参考になるが、続古事談「ひさこ

を立てて、芋粥を入れたり」は語順がおかしいような気はする。

【図】は十六世紀の絵巻(文化庁蔵(紙本著色酒飯論図))で時代

は下るが、ヒサゲの大きさ・形状などがわかるもの。

●いもかゆ 〔色〕「署預粥 イモカユ」

(イ飲食)、〔観〕「暑預(粥) イモガユ」

(法下三八・三拍目濁声点)。ヤマノイ

モを薄く切ったものを甘葛(あますぢ)の汁に混ぜ

て煮たかゆ。中古、宮中の大饗、貴族



の宴などの際に用いた。和名抄「署預粥 和名以毛加由」(飲食部水漿類)、「芋粥」(後二条師通記・寛治二年十二月九日)

●候 サブラウカソウロウか、ということについては、一般的には次のように言われる。

・「さぶらう」が「そうろう」に変化したのは、中古末から中世前期にかけてと思われる。ただし「平家物語」には、男性用語が「そうろう」、女性用語が「さぶらう」という使い分けがあったとされ、中世になっても女性には「さぶらう」を用いていたと考えられる。「ロドリゲス日本大文典」にも「書き言葉で女子にのみ使われる」とある。(日国「さぶらう」語誌)

・この語は、漢字で「候」と書かれることが多く、また、かな書きも「さぶらふ」の形であるため、「さぶらふ」か「さうらふ」かの区別がつけにくい。(中略)歴史的かなづかいについては、「さうらふ」の確例はないにしても、「さうらふ」ならば語源的に関係の認められる「さぶらふ」または「さむらふ」との関係が、あり得べき音変化として解明できるが、もし「さぶらふ」であったとすると音変化の説明に困難を生ずるという理由から「さうらふ」と推定する橋本進吉説によった。

(日国「そうろう」語誌)

続古事談にはかな書き例があり(F本・類本の41話、62話、90話、

145話、167話)、いずれも「さぶらふ」で、新大系は「さぶらふ」と濁点を付す。

●後涼殿 [色]「後涼殿 コウリヤウテン」(コ地儀)。黒川本は見出し字の左傍に「コウラウ」と記し、その下に「私云源氏物語ヨミクセ也」と加筆する。源氏物語大成によれば、絵合巻では大島本「後涼殿」が陽明家本で「こうりやう殿」、池田本・肖柏本・三条西家本で「こうらう殿」。宿木巻では大島本の仮名書き「こうらう殿」が三条西家本で「こうりやうてん」。「殿」は呉音デン、漢音テン。「後」は呉音カウ・ゴ、漢音コウ。漢音よみなら「コウリヤウテン」となるが、「涼」字の韻尾はリなので「コウリヤウテン」となる。日本に「後涼殿」は無いが、「清涼殿」がXeiriōden またはXeiriōdenと記されており、「殿」はデンと読んでよきそうだが、このような筋道で考えた場合、鼻音韻尾の無い「弘徽殿」(42話)はどうなるか。

●広庇 22話にかな書きあり。狭衣物語・一「御前のひろびさしに、太政大臣の権中納言(略)若上達部、あまた候給に」。

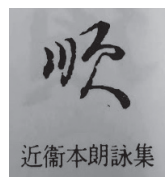
●包丁 [色]「庖丁 飲食部 ハウチヤウ」(八畳字、十巻本も同じ)、「丁ヨホロ夫也仕丁庖丁等也」(ヨ人倫)。(庖の丁)の意で、もとは徴用されて調理に当たった成人男子のこと。和名抄「料理魚鳥者、謂之庖丁」(居宅類「厨」)、宇津保・蔵開上・絵解「この

〔産養ノ贈物テアル白銀ノ〕鯉は生きたるやうなる物かな。ほとほとはうちやう望まむとぞ思へる」。日国語誌「この語は一般的に〔中略〕客人や貴人の目前で魚や鳥（特に鯉・鶴）をさばいてみせるといふ、儀礼的な意味合いのこめられた調理を意味した。〔中略〕中世末頃になると、魚・鳥に限らず調理用の刃物一般を指すようになった」。今昔「遣戸ニ包丁刀ノ被指タリケルヲ見付テ」（二六の二三）の旧大系注は「諸本かく作るが「包」は庖の省画」と記す。宇治拾遺「まな板に、ながやかなるはうちやうかたなを具して置たり」（二一九）、三代制符（後鳥羽天皇宣下、建久二年（一一九一）三月二八日）「俎一枚、包丁刀一柄」。なお、『莊子』の「庖丁、為文惠君」、解牛（養生主篇）が古い例で、文脈上「庖丁」は人名と解するのが一般的だが、「レントゲン」「サンドイッチ」のような固有名詞の普通名詞化と同じではないだろう。

●明原 神本、賀本は「明原」だが、他は「明順」とする（『注解』による）。古事談は「伊予守明順朝臣」で、高階明順（あきの）（？〜一〇〇九）は実在。両字の接点は「順」の「頁」と「原」の草体の字形上の類似にあるだろう（図3）。ところでF本では他に七か所の「原」字を確認できるが、この16話の字だけ明らかに形がおかしい。

【表1】は60話、109話、118話の「原」字との比較で、当該字は一画目の縦線が独立しており、横画から起筆する「厂」の形ではない。

偏と解釈すると「源」に近いように思えるが、【図3】「順」筆は左に流れており「巛」の形でないことはF本18話の同筆の「源」字との比較で明らかである（コピーの図では不鮮明だが、写本では墨の色が一画目だけ薄く、後で書き加えた可能性も考えられる）。



	16話
	60話
	109話
	118話
	18話 (源)

【表1】

●衝重 「ツイカサネ」は写本にある振り仮名。源氏物語・柏木「世のつねの折敷、つかかさね、高坏などの心ばへ」。19話に仮名書き例あり。伊京集「衝重ツヒカサネ」（ツ財宝）

●御酒（まいらす）以下の筆例のように貴人らによる酒宴の定型表現と考え、「酒」をサケとは読まず、接頭辞（オホム／オン）を伴った「ミキ」とした。伊勢物語「親王にむまの頭おほみきまるる」（八二）、宇津保物語「大臣とりはやし給て、御みきなど少しまるる程に」（蔵開中）、源氏「六条院より、おほむみき、御くだもの

など奉らせ給へり」(御幸)、「御みき、あまたたび参りて」(若菜上)、増鏡「水飯やうの物など、若き上達部・殿上人どもに給はせて、おほみき参るついでに」(一・おどろの下)、**色**「神酒 ミキ」(三飲食、黒川本)

●**酔**てそみて 『注解』の神本は同じ(校異に「酔てぞみて」とする)だが、他本多くは「酔にのぞみて」「そみて」で解釈するならば四段活用の「**染**みて」か。つまり(酔って、その酔いが深く入り込んで)ならば文脈上その後の醜態に繋がりがやすいが、この意味のソムは「心にソム」「世にソム」など普通二格を取るもので、「**書**かれていない語句。

●**冠** **色**「冠 カウフリ」(カ雑物)。カガフリ↓カウフリ↓カンムリ。F本の「冠」は全て漢字表記。仮名で「かうぶり」とあるものは全て動詞(責め/罪/賞をカウブル)。

●**咲** **色**「咲 ワラフ 咲味嗤(二三字略)弄(ワ人事)、**観**「咲ワラフ エム エ エワラフ」(仏中三一)。

●**広幡のおと**、藤原顕光(九四四〜一〇二二)。広幡は邸宅があった場所。従兄弟である藤原道長(文中の「左大臣」)の権勢に敵わず、その恨みから悪霊になったと伝えられる。「道摩八)呪詛の故を問るるに、『堀川左大臣顕光公のかたりをえて仕たり』

とぞ申ける。(中略)顕光公は、死後に怨霊となりて、御堂殿辺へは祟りをなされけり。悪霊左府となづく云々。」(宇治拾遺物語・一八四「御堂閔白御犬、清明等、奇特の事」)

●**あさけら(れ)** **色**「嘲 アサケル 哂(九字略)欺已上同」(ア人事)

●**くなか(れ)** **観**「婚トツギ/クツルブメマククナク」(仏中一五)。「クナグ」は男女が性交する意と考えられ、『注解』は「妻を寝取られてるくせに」と訳す。同書七二〜七四頁によれば本話は寛弘元年(一〇〇四)頃の話と考えられ、その場合道綱五〇歳、顕光七〇歳(一〇〇〇年頃未亡人と再婚)。古事談二八話には「妻ヲ八人ニクナカレテト云々、道綱密通右府北方云々」とあり道綱が密通の当事者ということになるが真偽は不明。霊異記訓釈には「天皇、后と大安殿に寐て婚合し給へる時に(興福寺本訓釈婚合久奈加比二合)(上・一)、「汝、吾が妻に婚。頭爵ち破らるべし(国会図書館本訓釈婚クナカヒス)(中・一)」といった「クナカヒ」という語形が見える。

●**いはれたりける** 連体形なので、終止と取らず下に続けて、「言ったの(を聞いた人々は)」と解釈した。この話全体はケリの終止形終止と係り結びが守られている。

●**はちをしらす** 大鏡「さばかりになりなむには、物の恥知らで

ありなむ」(師尹)、今鏡「位高く上らむと思ふは、身の恥を知らぬにこそありけれ」(ふぢなみ中・昔の衣)のような表現から慣用句化したと考えられる。文明本節用集「不_レ知_レ(耻)」(八態芸)。「恥知らず」と名詞化した例は虎明本狂言「しうと、『あのはぢしらず』と云て」(水掛簪)がある。古活字本平治物語「是は諸国のかり武者どもが、恥をしらず、妻子を見んために、本国におち下り候ふなり」(中・義朝敗北の事。金刀比羅本・半井本では「恥をかへりみず」)。金刀比羅本保元の「物の恥をも知りたる者は音をませず」(中・白川殿へ義朝夜討ちに寄せらるる事)は半井本には無い。

●御遊 色【御遊キヨイウ】(キ疊字)

●上 一条院のこと。うへ。宇津保物語・俊蔭「うへも春宮も召しまつはし、うつくしみ給ふ」、枕草子・六・うへにさぶらふ御猫は「朝餉のおまに、うへおはしますに」

●道総 「道綱」の誤り。「綱」の草体は「総」字に近くなる。口(けい)がまえは短くなって「ハ・フ」のようになり、「山」は楷書の場合の筆順の2画目から2↓1↓3の順で書くので、「心」と似た形になる(表2)。異体字として、綱には「經」「總」、総には「總」がある。

【表2】草体の「綱」と「総」

綱	総

【翻刻】

(17) 堀川院御時の逍遙_(せうよう)*に、序代_(じよだい)*書くへき人なかりけり。大業_(おほいげふ)

藏人国資「賢イ」、無才*の物にて人ゆるさず、五位藏人時―*書きてけり。其日、主上、殿上にて人々に連句いはせ給けるに、国資に「末句*いへ」と仰られければ、「今日、わたたくし*の衰日*也。憚り*あり」と申ければ、主上、殿上の暦を召して御覧するに、巳日也。「巳日、衰日いまたなき事也。いかてか君を欺き*申*、連句いはぬほどのもの、いかてか博士*になるへき」と仰られける。今も昔も無才の博士はあるものなりけり。

【注釈】

●道遥 [色]「逍遙セウエウ」(七疊字)。行楽、遊覧。平中物語「この男、はた、宮仕へをば苦しき事にして、ただせうよう」をのみして(一)。歴史的仮名遣いは「エウ」だが、関戸本古今集(平安後期写本)に「賀茂河原に川せうようしける」(巻四詞書(二七〇)つらゆき)という例があり、この時期には字音において拗長音が発生していたことが分かる。

●序代 漢詩・和歌の序文。序題。景色を鑑賞したりするために外出し、出先で詠作する。小右記「帥乞取帚筆、書序題」(寛弘五年(一〇〇八)二月二〇日)、大鏡「和歌の序代書かせ給へり」(四・道隆)、文明本節用集「序題 ジョダイ」(シ態基)。

●大業 [色]「大業文章部タイケフ」(タ疊字、黒川本)。古代・中世における令制の官人登用試験制度の下での最終試験合格(者)特に、文章得業生が宣言によって対策(試験)に応じ、方略策(解答)を献ずることにいう場合が多い。類聚符宣抄・文章博士大江維時同朝綱請令橋直幹奉方略試状「依博士之挙、成大業」(九卷・承平五年(九三五)八月二五日)、金刀比羅本平治「信西入道と申は(中略)大業も遂す、儒官にも入らず」(上・信西出家の由来)

●国資 藤原国資(一〇六七〜一二二六?)。中右記に「廿四日、

今日秀才藤原国資献策」(寛治五年二月)、「前文章得業生藤原国資(安芸守有俊朝臣男)則参内」(寛治六年一月一日)とある。

●無才 宇津保物語・藤原の君「しかあるを、ざえある者は沈め、むさいの男は先に立つ」、源氏物語・帚木「むさいの人、なまわらならむふるまひなど見えむに、はつかしくなん見え侍し」。日ボ「Musa サイカクナシ」

●時― 後二条師通記の記事(寛治六年十月二十九日の逍遙)には「序者時範也」とある。

●末句 どう読むべきか。語自体は万葉集に「或本歌末句云忘れかねつも」(二・三二七五)とある。字類抄には無く、呉音マツは「末額マカウ」のみ、漢音は「末仕バシ」「末葉バツエフ」「末座バツザ」(ハ疊字)がある。日ボでも「Matza (マツザ)。バツザと言う方がまさる。スエノザ」、「Matzo (マツヨウ) (訳)子孫。バツヨウという方がまさる」とあり、漢音が優勢のように見える。

●わたくし 個人的・私的。163話に「御所ニテ私ノ仏養スルコトハ便ナキ事トテ」とある。「中古から中世前期ごろまでの用法は、すべて漢語の「公私」の觀念に支配されている(中略)一個人としての自己を(中略)自称の代名詞としたのは中世後期からであったようである」(古語大辞典「語誌」原田芳起執筆)

●衰日 運歩色葉集「衰日(スイニチ)」(ス部、元龜本・静嘉堂

本)。陰陽道でいう悪日の一つ。その人の生年の十二支によって一定している生年衰日、年齢によって毎年変わる「行年衰日」がある。江談抄・一「主上廿二歳、仍以酉日、為御衰日。」

●はばかり [色] 「憚 ハハカル 憚諛俊(一〇字略) 迷已上同(ハ辞字)、**観** 「憚ハハカル」(法中七七、二拍目濁声点)

●あざむき [色] 「欺 アサムク 嘲詐謗(二八字略) 驕已上欺也」(ア人事)。新撰字鏡「俊阿佐牟久又加太牟又伊豆波留、凶書察本名義抄「給イツハルアザムク」。日国語誌「地藏十輪經元慶七年点、二」などの訓点資料や、「新撰字鏡」「書陵部本名義抄」などの辞書に、「いつはる」「へつらふ」といった訓と並び用いられているところから、平安時代には、これらと似た語感(中略)「相手の気持ちに乗じる」という共通の意義特徴を持っていたものか」

●申 日国語誌「補助動詞としての用法は、中世においては、「奉る」「参らす」とともに多く用いられた」

●博士 52話、69話に仮名書き「はかせ」がある。[色]「博士ハカセ 儒同」(ハ官職)、「博士 文章部ハクシ入学分」(ハ疊字)。日国語誌(一)「書紀・応神一五年八月」には「(中略)汝に勝れる博士亦有りや」とあり、北野本訓では「フヨミミヒト」とよまれている。(2) 応神以降、「博士」は百済との交渉に関して記録されているので、百済の制度に関係があると思われる、「はかせ」も

百済の音かもしれない」。東大寺諷誦文稿「五百(の)巫(ハカセ)(を)召(して)。(二五九・平安初期点)

【翻刻】

(18) 円融院、大井河*に御行ありけるに、先、少井寺*の前に絹屋*をたて、おはします。大入道殿、摂政の時、御膳*まふけられけり。茶院にてそありける*。其後、御船にたてまつり*て、戸無瀬*におはしましけり。詩歌管絃*、をの／＼船ことなり。源中納言保光卿、題たてまつる。「**翫**二水辺紅葉」。*とぞ。詩の序、右中弁資忠、和歌の序、大膳大夫*時文つかうまつれり。法皇、御衣をぬきて、摂政にたまふ。摂政又衣をぬきて、大藏卿時仲に給けり。管絃の人々、上達部きぬをかつけ*られけり。内裏より頭中将誠信朝臣、御使にまいれり。禄をたまひて帰りまいる*。摂政、管絃の船に候時仲の三位を召して、院の仰を伝て参議になされけり。人々ひそかに云ける、「主上の御前にあらず、たちまちに参議をなさるゝ事いか、あるへき」と傾き*けり。今日の事、何事も興ありていみじかりけるに、此事にすこし興さめにけり。

【注釈】

●大井河 [色]「大堰川 オホキカハ」(才国郡)。桂川のうち京都府亀岡盆地から上流をいう。秦氏の祖先が大堰を設け、灌漑用水を起こしたため呼ばれた。古今集・恋一・一一〇六「けふ人をこふる心は大井がはながるる水におとらざりけり」

●少井寺 未詳。他本「大井寺」「小井寺」「少林寺」など。出典(古事談1・16)に無い一文。

●絹屋 絹の幕を四囲、上方に張りめぐらした仮小屋。栄花物語・

浅緑「前にきぬや造りて、黄牛飼はせ給ふ」、今昔物語集・一二・

二二「其ノ南二絹屋ニヲ打テ、唐・高麗ノ楽屋トス」、観「幕マトフ ハル オホフ キヌヤ」(僧上二)

●御膳 天皇の食事。真信公記抄「射手大夫六七人許、射間供御

膳」(延喜七年(九〇七)正月一七日)。とはずがたり・三「大宮・

東二条・准後の御せんまゐる」、日ボ「gojani」。時代が下ると、(女房詞などを経て近世に)食事、飯の丁寧な言い方になる。

●茶坑にてそありける [色]「茶坑 チャワン」(手雑物)。茶碗は

陶磁器のことで、今昔「茶坑ノ器ニ何葉ニテカ摺入ヌル」(二四の

八)など、容器の種別を表している。この時代、土器、木製(漆器)、金属製(銀器)などが存在したが、そういうものではなかった、

ということ述べている。第5話では「油漏器」を天皇が正月

に菓を飲むために使う(美しい模様の)陶磁器と推定したが、こ
も同様に盛儀の描写か(古事談の類話(一の一六)には無い部
分)。『参天台五台山記』(二〇七二の記事)には日宋貿易の重要な
輸入品目の一つとして「茶碗」が記されており、そういう含みで
この結び文は「…御膳が設けられた。使用されたのは舶来の美
しい陶磁器なのであった」と解釈できるのではないか。

●御船にたてまつり タテマツルは「貴人の行動を、傍からその
用意をするもの」としていう尊敬語(日国)で、お乗りになる。

●となせ 京都市西京区嵐山の紅葉の名所。歌枕。惠慶集(10C
末)「大井河かはべの紅葉ちらぬまはとなせの岸にながみしぬべ
し」、師説自見集「吉野川。戸無瀬川」(上・筏、今川了俊(一三
二六く一四二〇)※統群書類従による)

●詩歌管絃 米沢本沙石集・四・一「詩哥管絃(シイカクハンゲ
ン)、酒宴、博奕ヲ愛スル人」。日国「しいか」語誌「古辞書や訓
点資料には、上昇調や下降調のアクセントを持つため、あるいは
強調表現等のために出現する長音の発音を文字化したと思われる、
長音表記の例がしばしば見出される。例えば「猿投神社蔵正安本
文選」(正安四年校合識語)には、「駮姿(サフサア)」「規矩(キ
イク)」「沢廣(タクグウ)」「函書(トウシヨ)」のように長音をア、
イ、ウなどの仮名で表記している。これらは口語形として実現し

た音声を忠実に表記した形であり、一方に当然規範形としての非長音形サ、キ、グ、トが共存していた。このような長短両形が共存するのは、古代日本語が音節の長短を音韻として区別しなかったためであったが、南北朝から室町時代頃を境として、現代語のように長短を音韻として区別するようになる。そのため、多くの長音形は消滅したが、特定の語は、原典に存在していた長音表記が典拠となつて室町時代以後に継承されて生き残ることになった。詩歌（シイカ）はそのような語群の中の代表的な例である。なお、イ列長音以外にも、例えば夫子（フウシ）、女房（ニヨウボウ）、披露（ヒロウ）などがある。」

● 断水辺紅葉 [色] 断 モテアソフ（毛辞字）

● 大膳大夫 [色] 「大膳職（タイセンシキ）大夫亮進属」（夕官職、黒川本）、日ボ「*Daijennō daijū*」。おほかしはでのかみ。和名抄「大膳職（於保加之波天乃豆加差）」（職官部官名・職）

● かつけ かづく（下二段）。貴人が禄として衣服を与える。日国「かづく」語誌「古今集声点本では「カツク」「カツグ」両形がみられるが、中世末期には、「日葡辞書」の記述のように「カツク」が規範的な語形と考えられたようである。」[色] 「纏頭カツケモノ」（力雑物）、観「纏頭カツケモノ」（仏下本二二）

● かへりまいる 尊い場所や人物の所に帰る（戻る）意。「帰りま

かづ」は「尊い場所や人物の所を退出して帰る」こと。竹取物語「此ないし帰り参りて、此由を奏す。「まゐる」が後項にくる（V＋V）型複合動詞はほかに「急ぎ参る」「馳せ参る」「もて参る」などがあるが、複合語の前項と後項との関係が「帰り参る」だけ異なると思われる。古語大鑑は「出先から帰って来て、天皇など貴人の所に参上する」のように「帰り」と「参る」とを分解する語釈だが、この続古事談の文脈では「内裏からは頭中将が来て、録を受け取って内裏に戻った」くらいの意味になるうから、前項と後項のつながりの弱い並列的なものとは考えにくい。

● かたぶき [色] 「傾」カタフク（二五字略）仄已上傾也（力辞字）。四段動詞。カタムク（下二段）は中世以降の形。多く引用の後で、「く」と不思議に思う、あれこれと考える、非難する」のような意味をもつ。竹取物語「竹取の翁、この匠らが申すことは何事ぞ、とかたぶきをり」、愚管抄・五・後鳥羽「こはいかにと、さすがに世の末にもふかくかたぶく人多かりけり」、今鏡・二・紅葉の御狩「金葉集といふなこそ撰者のえらべるにや。かたぶく人はんべるとかや」、平家物語・四・厳島御幸「今度の讓位いつしかなりと、誰かかたむけ申べき」

※図1、図2は『かな名跡大字典』、図3と表2は『日本名跡大字典』によった（いずれも角川書店、一九八一）。